

長野県150周年記念／リニューアル・オープン5周年記念

カンディンスキー 世界は鳴りひびく —日本のコレクションでたどる画業と反響—

2026年11月7日(土)～12月27日(日) 本館 展示室1・2・3



ワシリー・カンディンスキー 《絵の中の絵》
1929年 国立国際美術館

貴重な国内所蔵品が集結

近現代美術の重要な作家であり、抽象絵画の成立を主導したワシリー・カンディンスキー。自らが芸術の本質と考えた〈内なる響き〉により、形態と色彩の絶え間ない探求を続けたその足跡を、初期から晩年までの国内所蔵作品から展観するとともに、日本の芸術家との関係にも焦点を当てます。

展覧会名 カンディンスキー 世界は鳴りひびく —日本のコレクションでたどる画業と反響—

会期 2026年11月7日(土)～12月27日(日)

休館日 水曜日

会場 本館 展示室1・2・3

開館時間 9:00～17:00(展示室入場は16:30まで)

観覧料 一般 1,200(1,100)円
大学生及び75歳以上 1,000(900)円
高校生以下又は18歳未満 無料

※コレクション展[本館・東山魁夷館]との共通料金：一般 1,700円、大学生及び75歳以上 1,300円

※割引の併用不可

※()内は20名以上の団体料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※高校生、大学生及び75歳以上の方は、身分が確認できるものをご提示ください

※長野県内の大学等に通う学生は無料(詳細は当館ホームページ参照)

主催 長野県、長野県立美術館、カンディンスキー展実行委員会

共催 長野県教育委員会

後援 長野市、長野市教育委員会、長野商工会議所、善光寺、長野県芸術文化協会、長野県美術教育研究会、(公財)八十二文化財団、(公財)ながの観光コンベンションビューロー、JR東日本 長野事業本部、信濃毎日新聞社、NHK長野放送局、SBC信越放送、NBS長野放送、TSBテレビ信州、abn長野朝日放送、FM長野、INC長野ケーブルテレビ

助成 一般財団法人 地域創造

※諸般の事情により、会期などに変更が生じる場合があります。最新情報については当館ホームページをご覧ください。

みどころ

1. 国内所蔵のカンディンスキー作品が一堂に会します！

日本の多くの美術館がカンディンスキー作品を所蔵しており、本展ではそれらの作品によりカンディンスキーの画業を追うことが可能になりました。単独の回顧展は、1987年の「カンディンスキー展」(東京国立近代美術館・京都国立近代美術館)、2002年の「カンディンスキー展」(東京国立近代美術館・京都国立近代美術館・福岡市美術館)以来となります。

2. カンディンスキーが日本に果たした影響を詳しく紹介！

カンディンスキーの作品は、第一次世界大戦前後の日本に紹介されるやいなや、その先駆的な芸術と理論が、日本の美術作家や美学者たちに大きな反響を呼びます。その受容の様相を、最新の研究をふまえて紹介します。

3. 画業の根底に流れつづけるロマンティズムにも注目！

「抽象絵画」の文脈で語られることの多いカンディンスキーですが、初期に描いていたロシアやドイツの童話世界を思わせるロマンティックな空想上の光景は、モチーフの抽象化や、形態と色彩の組み合わせの模索がおこなわれるなかに、深く〈響き〉続けてきました。カンディンスキーの魂を揺さぶったロマンティズムもご堪能ください。

展覧会概要

ワシリー・カンディンスキー(1866-1944)は、ロシアに生まれ、ドイツやフランスで活動期のほとんどを過ごした画家です。「抽象絵画」の創始者のひとりとして知られており、それまでの絵画のように、目に見えるものにとらわれることなく、色と形をもちいて、自由な精神と純粋な感性による芸術を探究しました。芸術の本質として〈内なる響き〉という独自の概念を提唱しますが、絵画にとどまらない諸芸術を共鳴させようとする先駆的な表現は、現代の芸術に大きな影響をもたらしています。

本展は、国内に広く収蔵されている作品からカンディンスキーの画業をふりかえる、初めての試みとなります。日本ではカンディンスキーの理論と作品が同時代的に受け入れられてきました。日本の近代絵画を中心とした受容の諸相にも焦点を当てています。

カンディンスキーがくぐり抜けた20世紀前半の世界大戦と革命は、絶対的な真理にかわる新たな価値観の誕生をうながしました。「世界は鳴りひびく」—カンディンスキーによるこの言葉は、世界の内と外に充満する〈響き〉に心揺さぶられた画家のロマンをも反映しているといえるでしょう。〈響き〉がもたらした絵画の数々に耳を傾けていただければ幸いです。

展示構成

第1章 ミュンヘン、内なるロシアと色彩

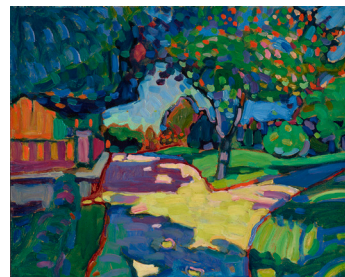
モスクワ大学で法学と経済学を学んだカンディンスキーは、やがて画家を志し、1896年にユーゲントシュティールが花開く芸術都市ミュンヘンに渡ります。初期の主要な題材は、ミュンヘン近郊や旅先の風景、そして中世のロシアやドイツを思わせる空想上の光景でした。鮮やかな色彩感覚やモチーフを単純化する視覚的効果はこの頃からすでに見られます。本章では、新しい芸術の可能性を胸に、油彩画、水彩画、テンペラ画、木版画などの技法により模索を続けた、初期の作品群を展示します。



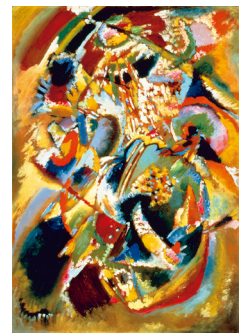
ワシリー・カンディンスキー 《商人たちの到着》
1905年 宮城県美術館

第2章 抽象への道のりと「青騎士」

1908年以降のムルナウでの制作を通じて、カンディンスキーはモチーフを、色彩を帯びた形体の塊として捉えるようになります。神智学などの神秘思想への関心も背景にしながら、風景や宗教的イメージを触媒とし、やがて特定の対象を示さない色と形のみにより、自らの〈内なる響き〉を表現する絵画が生まれました。美術団体を組織し、理論家としての活動も目覚ましく、1909年にミュンヘン新芸術家協会を結成、さらに1911年末にはこれを脱退し、フランツ・マルクらと「青騎士」を結成します。本章では詩版画集『響き』をはじめとした総合芸術的な表現活動や、「青騎士」の仲間たちの作品も紹介します。



ワシリー・カンディンスキー 《3本の菩提樹》
1908年 石橋財団アーティゾン美術館



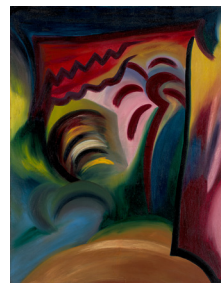
ワシリー・カンディンスキー
「E.R.キャンベルのための壁画No.4」の習作(カーニバル・冬) 1914年 宮城県美術館

第3章 カンディンスキー、日本における響き

日本では1910年代以降、カンディンスキーの作品と美術理論が紹介されました。美術雑誌では図版の掲載が続き、山田耕筈と斎藤佳三の招来品による「DER STURM木版画展」(1914年、日比谷美術館)には、カンディンスキーの木版画2点が出品され、国内で初め



ワシリー・カンディンスキー
《尖端》1920年 公益財団法人大原芸術財団 大原美術館



神原泰 《スクリアピンの『エクスタシーの詩』に題す》1922年 東京国立近代美術館



斎藤佳三 《リズム模様色糸刺繍帯》
1940年頃 東京藝術大学大学美術館

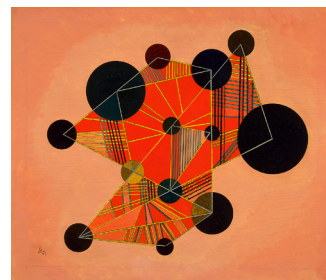
て実作品が展覧されます。日本の画家たちは、カンディンスキーにいかに関心したのでしょうか。造形の面で示唆を得た者や理論に関心を示した者など様々です。本章では、これらの作例を展示して個々に検証を加えることで、カンディンスキーが日本にもたらしたものの性質を考えます。

第4章 バウハウス、幾何学のしるしのもとに

第一次世界大戦勃発によりロシアに帰国したカンディンスキーは、ソヴィエト政府の委嘱で祖国の美術行政に従事します。この時期に構成主義の作家たちと接する中で、画面は幾何学的形体を取り入れたものへと変化しました。1921年に再びドイツに渡ると、ヴァルター・グロピウスからの招聘に応じてヴァイマル・バウハウスのマイスターに着任します。バウハウスでの造形教育は、カンディンスキー自身にとっ



ワシリー・カンディンスキー 《支え無し》1923年 ポーラ美術館



ワシリー・カンディンスキー 《浮遊》1927年 宇都宮美術館

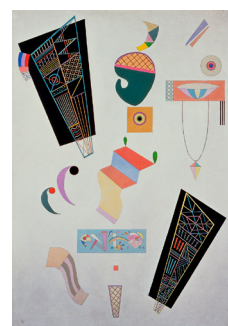
ても理論を改めて体系化する契機となり、円やグリッド模様などを特徴とする構築的な作品が制作されました。本章では、この時期の様式を代表する作品群や、日本にも早くに紹介された版画集「小さな世界」、バウハウスでの指導内容を伝える資料などを展示します。

第5章 パリ、穏やかな飛翔

ナチスの圧力によるバウハウス閉鎖を受け、カンディンスキーは1933年にパリに移り、近郊のヌイイ＝シュル＝セヌで晩年を過ごします。パリの文化人たちとの新たな交流と、自然科学への幅広い関心は、微生物のような柔軟で生命感あふれる新たなモチーフを生み出し、色づかいの変化と共に、画面にさらなる変容をもたらしました。本章では、パリ時代の油彩画のほか、当時のスケッチブックに残された素描も展示します。〈内なる響き〉を表現する造形言語を刷新し続けた、画家のあくなき探求の精神を見ることができるでしょう。



ワシリー・カンディンスキー 《全体》1940年 東京国立近代美術館



ワシリー・カンディンスキー 《二つの黒》1941年 鹿児島市立美術館



ワシリー・カンディンスキー 《鎮められたコントラスト》1941年 宇都宮美術館

作家プロフィール

ワシリー・カンディンスキー Wassily Kandinsky (1866-1944)

1866年ロシア・モスクワ生まれ。抽象画家の先駆者であり、表現主義の絵画から幾何学的に構築される作風へと変化する。モスクワ大学で法学・経済学を学んだのち、1896年にミュンヘンに渡り、1900年ミュンヘン美術アカデミーに入学。1911年にフランツ・マルクらとともに前衛芸術家グループである「青騎士」を結成した。同年、理論書『芸術における精神的なもの』を刊行。1914年にドイツからモスクワに移り、1917年のロシア革命を経験。ソヴィエト政府の委嘱で美術行政に従事する。1922年には再びドイツに戻り、ヴァイマル・バウハウス(1919～1933)の壁画工房のマイスターとして教鞭をとる。同校のデッサウへの移転後に、理論書『点と線から面へ』(1926)を刊行。1933年にはフランスへ移り、ジャン・アルプやジョアン・ミロらと交流。1944年没。

主な展示作品

作家名	作品名	制作年	技法・材質	所蔵先
ワシリー・カンディンスキー	商人たちの到着	1905	テンペラ、カンヴァス	宮城県美術館
ワシリー・カンディンスキー	3本の菩提樹	1908	油彩、板	石橋財団アーティゾン美術館
ワシリー・カンディンスキー	「E.R.キャンベルのための壁画No.4」の習作 (カーニバル・冬)	1914	油彩、厚紙	宮城県美術館
ワシリー・カンディンスキー	尖端	1920	油彩、カンヴァス	公益財団法人大原芸術財団 大原美術館
ワシリー・カンディンスキー	支え無し	1923	油彩、カンヴァス	ポーラ美術館
ワシリー・カンディンスキー	浮遊	1927	油彩、厚紙	宇都宮美術館
ワシリー・カンディンスキー	全体	1940	油彩、カンヴァス	東京国立近代美術館
ワシリー・カンディンスキー	鎮められたコントラスト	1941	油彩、カンヴァス	宇都宮美術館
神原泰	スクリアピンの『エクスタシーの詩』に題す	1922	油彩、カンヴァス	東京国立近代美術館
斎藤佳三	リズム模様色系刺繍帯	1940年頃	絹	東京藝術大学大学美術館

関連イベント

講演会1 カンディンスキー 世界は鳴りひびく

講師：松本 透氏(アーティゾン美術館 副館長)
日時：11月7日(土) 14:00～15:30 (開場13:30)
会場：本館 地下1階 ホール
定員：先着100名
参加費：無料(要観覧券)
申込：不要

ギャラリートーク (担当学芸員による展示解説)

日時：11月14日(土)／12月5日(土) 各回14:00～
会場：本館 展示室1・2・3
参加費：無料(要観覧券)
申込：不要(ご参加の方は、14:00までに展示室3入り口にお越しください)

講演会2 カンディンスキー美術談義！
宮城県美術館・宇都宮美術館のコレクションを中心に

講 師：小檜山 祐幹氏(宮城県美術館 副主任研究員 本展企画者)
石川 潤氏(宇都宮美術館 専門学芸員)

日 時：12月13日(日) 13:00～15:30 (開場12:30)

会 場：本館 3階 レセプションルーム

定 員：先着50名

参 加 費：無料(要観覧券)

申 込：不要

※諸般の事情により、イベント内容の変更や入場を制限する場合があります。

※障がいのある方やサポートが必要な方、手話通訳や要約筆記を希望される方は、2週間前までにご連絡ください。

■ 報道関係のお問い合わせ

長野県立美術館 総務課 広報係 (※2026/4/1～ 担当課・係名が変更となりました。)

〒380-0801長野市箱清水1-4-4(善光寺東隣) ホームページ:<https://nagano.art.museum>

TEL:026-232-0052 FAX:026-232-0050 E-mail:nam-pr@naganobunka.or.jp